『ミャンマー、優しい市民はなぜ武器を手にしたのか』　2026年02月02日

ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザへの攻撃は他国、他民族への軍事攻撃であるから、国際法に違反すると世界の関心が寄せられる。関心を寄せられても、ロシアは攻撃を止めないし、イスラエルは停戦後も、ガザの住民を殺害し続けている。法を無視し、力の支配が大手を振るっている状況である。ミャンマーでは軍事クーデターが起こり、国軍と民主化を求める民衆の過酷な戦いが展開されている。この戦いは内戦なので、世界の関心が薄いことは否めないだろう。テレビではしばしば、強力な軍備を持つ国軍と貧弱な武力で立ち向かう民衆の戦いを見せられている。西方ちひろ氏の『ミャンマー、優しい市民はなぜ武器を手にしたのか』を読み、彼の地における壮絶な戦いを知ることができた。

ミャンマーはかつてビルマと言い、仏教国で温和な民族として知られていた。「独立の父」と言われるアウンサン将軍が国軍を率いて、1948年に独立国家となった。アウンサン将軍の高潔な人格は慕われ、「ビルマ式社会主義」を目指したが、暗殺された。以後、軍政が続くが、軍人支配となり、経済は低迷し、自由と民主主義は消されていった。アウンサン将軍の長女スーチー氏を民主主義のシンボルとして担ぎ上げ、国民民主連盟（NLD）が結成され、民主化を求める運動を展開した。経済は好転し、自由を獲得していった。選挙のたびにNLDは成長し、スーチー氏は国家顧問に就任した。2020年の選挙で、NLDは83%の改選議席を得、圧勝した。ところが、2021年2月、軍の総司令官ミンアウンフラインが、選挙に不正があったとし、軍事クーデターを起こし、NLDの関係者を拘束し、全権を掌握した。10年前、民政移管したのに、一夜にして再び軍の支配下に戻った。ミャンマーの憲法では、軍人に多くの特権が認められているが、民主化によって、それらを失うのではないかと恐れてのクーデターであったと思われる。本書は、西方氏がクーデターの起こった日から、ヤンゴンでの日々の出来事をSNSで発信した投稿を、帰国後、整理し、まとめて上梓したものである。テレビを観ているような臨場感があり、民主派の人たちの息遣いが伝わってくる。「僕らは絶対に軍政を認めない！ 絶対に、だ！ 僕らが選んだ政府はNLDだ。選挙の不正なんて、ただの言いがかりだよ」と嘆き、憤っている。そして、絶対に、暴力は使わない。軍の挑発には乗らないと、優しいミャンマー人は忍耐強く、整然と鍋を打ち鳴らし、3本指を立て、反軍政をアピールし、民主化を求める市民的不服従のストとデモとを敢行した。しかし、1ヶ月も経たない内に、国軍は国民に向けて銃を発砲し、死傷者を出し、デモに参加する人々を拘束し、拷問にかける。国際社会は国軍を批判するが、効果的な関与はできない。日本は国軍と民主派双方に関係者を持っていると言いながら、国軍に加担しているのが実情である。追い詰められた民主派は武力闘争をしていた少数民族と共闘して、国軍と武力対決に傾いていく。非暴力主義だった民主派が武力で、国軍と戦うに至るには、優しいミャンマー人には相当の葛藤があったろう。軍を抜け、民主化闘争に加わる兵士もいる。また、国軍を抑え込んだ地域が広がっているとも聞く。「軍を倒すって本当に難しい。軍には中国やロシアの後ろ盾があるし、お金も刷り放題です。だから、真っ向勝負で軍を倒すというのは、正直厳しいと思います。ただ、いつか国軍と民主派が交渉につくとき、民主派の支配地域が広がっていれば、交渉を有利に進められる。彼らはそう信じて、戦っているんです」という言葉が正鵠を得ているのではないか。西方氏は1年で帰国しているが、民主派と思いを一つにしている熱い心に胸を打たれる。彼は、「民主主義国家をもう一度つくる。そのために人生を投げ打ち、銃を手にした大学生たち。軍政に『テロリスト』と糾弾される彼らが、本当に誰よりもミャンマーの明るい未来を信じる若者であることを、一人でも多くの人に知ってほしいと願う」と訴えている。